

名城大学 経済・経営学会会報

No.13

『名城論叢』
第四巻 第一号 付録
二〇〇三年六月三〇日
名城大学 経済・経営学会 発行

雑感——思いの変化
……… 岸川典昭 1
アラン島の断崖から
……… 村松定史 4
学外研究発表記録

雑感——思いの変化

経営学部長 岸川典昭

二〇世紀の血生臭い世界に「さようなら」というのが、二一世紀を迎えた時点での世界の人々の気持ちであったし、当然の希望であった。しかし、二〇〇一年九月一日の同時多発テロ事件はその衝撃が強烈であっただけに、その方向性を大きく変えるに十二分な起爆剤になったといえる。もちろん、当然の道が用意されたわけではなかったのが。

この事件に続くアフガニスタンへのアメリカ軍（イギリス軍を含む）の侵攻は、たとえそれが理不尽なものであっても、なんとなく当然のことのように思われたと言えなくもない。世界の同情が、アメリカ合衆国に集まっていたのであるから。

しかし、この辺から雲行きが怪しくなってきた。同情は、その内容を解釈する側によって、勝手に解釈されるようになっていった。気持ちのずれを感じるような人々が、ちょっと強引か

なと思われるような人々が登場し、その輪郭を徐々に明確にしつつあった。アフガニスタン侵攻でさえ、強引といえは強引であったのではないか。でもこの時点で未だ世界の人々には、ニューヨークで死んだ人々への強い哀悼と同情が、そしてアメリカ合衆国という国への「同情」があったといえる。

ところでイラクである。どうして、なぜという疑問の声が滲み出てきたのはこの時ではなかったろうか。アメリカ合衆国がイラクを攻める、どうして、なぜという気持ちが世界中から沸き起こってきた。どうやら、以前からブッシュ大統領やその周辺は、着々とイラク攻撃の準備を進めていたようである。彼らにとつて、それはひょっとして既成の事実であったのかもしれない。しかし、人々は、これが二〇〇一年九月一日の同時多発テロ事件に対するものとは異質なものと感じ始めていたし、不思議なものと映り始めていたといえる。世界中に戸惑いが広がる中で、「新保守主義（ネオコンサバティブ…Neo-conservative）」という言葉が、マスコミに登場するようになった。突然といつていくらいに、「新保守主義者」が歴史に登場し、クローズアップされてきたように思えた。

しかし、これは突然であつたわけではなかったようである。クリントン大統領時代の一九九八年一月に「アメリカ新世紀ブ

ロジェクト (project for new century of america)』が提出した報告書では、アメリカ単独行動主義Ⅱアメリカ最優先主義が表明され、フセイン大統領の危険性が指摘されていた。また、ブッシュが大統領に就任したことによって、対イラク政策が見直されたのである。同時多発テロ事件以前からフセイン大統領を打倒する機会が狙われていたと言われ始めた最中の二〇〇二年九月にブッシュ・ドクトリンが発表された。世界の民主化のためには先制攻撃も辞さずというものであった。アフガニスタンに続くイラクへの攻撃・侵攻は、ひょっとして九月一日の同時多発テロが、利用され始めたのではないかという気持ちの世界中に広がり始めた最中、二〇〇三年三月二〇日に「衝撃と恐怖」という作戦をもって始められたのである。国連の支持を求めない、同盟国イギリスさえも必要としないという強硬な姿勢を貫き通して。

短期間で、抵抗も少なく、終ったようで、ブッシュ大統領は五月二日に戦間終結宣言を出した。しかし、私には、こんなことで終るのだろうかという疑問を感じている。アラブ人の行動が、こんなものであるとは思えないからである。

私は、以前のある光景を思い出しました。昔、機会が会って友人とモロッコへ行った時の出来事を。友人は、シリア人で、父親は駐モロッコ・シリア大使であった。ある時、車に乗せられて買物へ行った時のこと、父親は、大きなベンツを郊外の路上に止めて、突然スイカ売りで取引を始めた。文字通り買物というのではなく、取引といった感じであった。チョー・チョー・ハッシ(丁丁発止)と、口と手と身振りを舞台俳優よろしく十

二分に使用して、取引していたことが強く印象に残っています。

アラビア語で会話するその内容は分からなかったが、暫くするとどうしようもないという感じで、例のごとく肩をすくめて車に戻ってこようとしていました。これで商談不成立、買わないのだらうと思っていたら、車に乗る寸前で、くるっと踵を返して再び戻って行き、チョー・チョー・ハッシとまた取引を始めたのでした。結局、スイカ一個を買ってニコニコしながら戻って来ました。スイカ売りもまたニコニコしていました。どちらが得したのか、損したのか分かりませんでした。まるで戦争のごとく取引して、最期はニコニコしていたのです。一〇分ぐらいでスイカ一個！ところで、これは、ここだけの話ではなく、肉屋でも、八百屋でも、乾物屋でも同じでした。十分に粘り、十分に納得してから物を買う姿を見ていると、商業の基本を見ている気がしました。同時に、アラブ人の老獪さ、したたかさ、忍耐強さということ、実際に知ることができたような気がしました。

イラク戦争では、シリアは、イラクの隣国であり、アラブ世界で、アメリカ合衆国が「テロ支援国家」とみなしている国です。「文明の衝突」が今後生み出されていくのかどうかはわかりませんが、イラク一国の問題で終わらないとすれば、アラブの人々が持っている、老獪さ、したたかさ、忍耐強さが今後中東のみならず、世界的な動きにどのような作用を及ぼすのかは、大に関心あるところです。

イラク戦争で、もう一つ驚いたのが、ポーランドのアメリカ合衆国支持でした。シリアもポーランドも私には大変馴染みの

ある国ですが、ポーランドがアメリカ合衆国をまさか支持するとは思っていませんでした。国連を無視して戦争を始めたアメリカ合衆国を支持することが、ポーランドのこれまでの歴史を否定することになると思っていました(もちろん、このニュースを聞くまで、想像もしていませんでした)。近くは、ナチス・ドイツのヒットラーによる第二次世界大戦中のアウシュビッツ(ポーランド語では、オシベンチン)の虐殺、歴史的には、ドイツ、ロシアによる数回の占領、百数十年にわたる国家としてのポーランドの消失(ポーランド語、ポーランド文化、ポーランド人民の否定)など、小国としての悲哀を何度も味わってきたポーランドにとって、国連の存在は大きな意味を持っていたはずでした。青天の霹靂とはこのようなことではないかと思いました。それでは、国連を無視して戦争を始めたアメリカ合衆国を敢えて支持した理由は何であったのであろうか。大きな要因は、やはり歴史の中で生み出されてきた感情でなかったのではないだろうか。ドイツ、ロシアへの怨念に似た感情が、今回の判断を生み出したと思うのである。今回国連中心を主張するドイツ、ロシアを、ポーランドは、歴史的に敵と見なしてきた感情から、「敵の敵は味方」と考えたのではないかと思われる。本来は、国連の存在を強く待望するポーランドの決定は、苦渋に満ちた決定だったと想像できるのである。大儀無き戦争に翻弄される小国の物悲しさを感じると言ってしまうことは、考え過ぎなのであろうか。そうであるとすれば、私としては、一片の望みをも打ち砕かれ抹殺されていった幾多の命や完璧なまでに破壊し尽くされた廃墟の中から立ち上がってきたポーランド

が、第二次世界大戦終了から五〇年たっても強国に弄ばれる国として、ポランスキー監督の『戦場のピアニスト』において表現されていることがいまだにあり続けることを認めることは、憚り無いことである。只ただ、ポーランドがアメリカ合衆国の行動を認めた決定の背後に、したたかな小国の計算が働いていてくれることを、私は望んでいるのである。

今は、シリアにしてもポーランドにしても、いままで経験した自分達の歴史と現実を十分に自家菜籠中のものとして、たとえ蟻螂の斧であったとしても、大国との間でチョー・チョー・ハッシと「取引」してほしいと思っている。

(経営学部長就任により、慣例で何か書いて欲しいとのことでした。教育を考える場合でも世界の動きの裏の裏を考えることが必要ではないかと思いましたが、推測を多くして書きました。イラク問題もどんなその内容も、またその影響の仕方も大きく変わって行っていると思えます。日本の政治だけでなく、経済にも、はたまたなるべくならご免蒙りたいですが、思想にも大きな影響が出てくるのではないかと危惧しています。もっとも、二一世紀が楽園を求められる世紀になつて欲しいと思っているのは私だけではないと思いますので、今後は、このようなことを考えながら教育・研究に励んで行きたいと思っております。)

二〇〇三年五月五日